研究ノート

初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究（その１）*

斎藤 俊則・都丸 けい子・大野 精一

この研究ノートは初任教員を始源 origin に教師のキャリア発達に関する要因や特性を探索的な heuristic 方法で調査研究したもので、現在進行中の共同研究の経過や成果の前半を報告したものである。教師キャリアで一度しか体験できない初任時における「悩みや心配、問題や課題」がどのようなものでこれにどう対処するのか。今回の前半報告では、これらのことがもつ重要性や初任者研修との関わりを研究史的に振りかえるとともに、追想的な方法で「悩みや心配、問題や課題」の内容やその対処方略が教師キャリアの展開でどのように変化するかを類型化した。

キーワード：　初任教員　教師キャリア　教師の悩み　熟達教師

１　はじめに

１）本稿は現在進行中の研究「ノート」で、しかもその前半として構成されている。また敢えて「探索的」(英語では exploratory でも、tentative でもなく、認知心理学等でいう heuristic である）な「調査研究」とした。できるだけ研究者の思いを率直に語り、少しでも新しい問題の所在（あり方）を自由に突き詰めてみようとしたものである。

２）先ずはじめに教師教育や教師キャリア発達に関する研究について見てみると、各教師の初任時における経験が重要であるにもかかわらず、多くの場合に追想的な研究等の間接的アプローチが主で、結果的に現実味と迫力感に欠けるものとなってしまっているように思われる。そこで本研究では先ずその第一段階として事例研究法により初任教員(複数)の一年間を探索的に追跡することで、実効性のある初任者研修のプログラムや初任者から熟達教師への教師キャリア発達を具体的に描くための基礎デザインを得ることを主な目的とした。

具体的には 2008 年 4 月から首都圏の公立学校や私立学校に教諭として採用が決定している本学修了の教師を 4 月から 1 年間、事例研究として探索的な追跡面接等の調査をし、①何に悩み、どのような方法・態度・方向性等で現実に対処し、②その結果さらにどこに課題・問題があり再チャレ

＊本稿は、日本教育大学院大学の特定研究費助成金による共同研究の成果報告である。

ンジしたか等を具体的に明らかにするが、その際に大学院等の研究者とこの教師が議論し本人の決断と責任で教育実践していく中で、さらに③大学院等の研究者の限界はこの教師から見てどこにあるのか、④議論を通じて大学院の研究者教員（大学以外の教育現場経験なし）と実務家研究者教員（大学以外での教育経験のある研究者）の発想や有効性・方向性にどのような違い等があるかも可能な限り検討したい。

３）本研究は 2007 年１月から準備をはじめ、同年４月から本格的に実施したが、共同研究者の一人が５月に入院したり、調査対象となった初任教員（単数・関東圏にある公立中学校の女性英語教諭）の公務多忙等により同年 7 月中断するに至った。ただしこの間に①赴任直前に「今の気持ち」「これからの課題と展望」の文章化を求め、さらに②赴任して一カ月後の４月 28 日に第 1 回面接調査（許可を得て録音した）を実施した。また③追想的な手法による教師キャリア発達等に関するアンケート調査も 11 月 10 日に東北圏で実施された研修会で行った。

現状では学校現場に密着した継続的な研究がいかに難しいか実感させられたが、この研究中断によって逆説的にわれわれのテーマ設定そのものの重要性（初任教員の教師キャリア発達困難性）に気づかされることにもなった。そこでこの研究計画を再検討し 2008 年 4 月から研究を再開した。

４）こうした経緯をふまえ、この研究ノート（その１）では本研究の意義（重要性）を再確認し、さらに上述の③は 2008 年 4 月から再開された研究にも一定程度の指針を与えるものと考えられるのでそれを総括してみた。この研究ノート（その１）は総じて 2008 年研究の予備的な役割を果たすものとなった。

続く研究ノート（その２）では関東圏の教育センターで行われた教育相談に関する研修会出席の、および東北圏の教育センターで行われた悉皆の高校教員 15 年経験者研修会出席の現職教員（各 60 名強）に対するアンケート調査の分析、さらに 2008 年 4 月から関東圏の公立、私立の中学校、中高等学校に教諭として赴任した本校修了生（2 名）を対象とした追跡面接調査の分析を行い、共同研究者 3 人の合宿検討会（2009 年３月）で議論する予定である。

５）この研究ノート（その１）は大野精一・斎藤俊則・都丸けい子（執筆順）の 3 人が分担執筆したものを大野が全体を見て若干の字句修正・追加をおこなったものである。研究の構想やその具体的な進め方、記述方法等に関して 3 人で協働し、議論しているが、分担した各執筆部分についてはそれぞれがその責任を負っている。

（大野精一）

２　本研究の意義

十数年ほど前から教師のストレスや疲労、バーンアウトが注目され、多くの研究がなされてきた（e. g., 宗像・椎名, 1988; Burke & Greenglass, 1995; 新井, 1999; 齋藤, 1999）。子どもの成長を支える教師たちが、今、自分自身の危機にさらされている。しかし、このような現状にもかかわらず、

教師に対する支援は乏しく、日々の教育実践において悩みを抱えながら、その対応に苦悩する教師も少なくない。特に、初任教師はリアリティ・ショックといった用語に表されるように、悩みや困難な出来事と遭遇しやすい時期である（都丸, 2007）。初任教師の抱えやすい悩みとメンタルヘルスとの関係は、入職初期の離職を予防する上でも検討を要するものである。ここで、悩み体験に関しては一方で、自己の変容や生徒とのより深い人間関係の構築といったポジティブな側面の契機となることも指摘されており（e. g., 稲垣･寺崎･松平, 1988; 原岡, 1990）、教師の成長・発達の一要因としても位置づけられる。教師教育や教師キャリア発達の分野においても、初任時における経験が重要であると言われている。したがって、初任教師はどのような悩みに遭遇し、どのように悩みを体験し、どのようにその経験を意味づけ、それが教師のキャリア発達という観点からどのように位置づけられるのかをより詳細に検討する必要がある。

初任時に遭遇した大きな悩みを検討する上で, 青年期の悩みの意義について検討した小田（2000）の指摘を踏まえ、悩みを抱いた際の悩み方とその過程を二つの視点（短期的・長期的視点）を繋ぐ軸が考えられる。ここから、本研究で着目する視点は、以下の３点である。

第１に「どのような思いや葛藤を抱えつつ悩みを体験するのかといった心的状態の推移」、第２に「悩みの発生や悩みの経過に人的・物的環境が与える影響」、第３に「悩み経験が当該教師のキャリア発達の中で有する意味」である。以上の３つの視点から得られた知見は、短期的にはメンタルヘルスに関して、長期的には成長・発達に関して、中期的には両者の関連に関して検討することを可能とする。

上述の第１・第２への着目は、初任時の悩みを短期的な視点から検討しようとするものである。ここから得られた結果は，初任教員に対する直接的アプローチおよび初任教員を取り巻く周囲の人的・物的環境への間接的アプローチにそれぞれ貢献可能な知見となるであろうことが予測される。ここで特に第２について検討することは、現状の初任教員研修体制における有効な部分と改善を要する部分を描き出すことを可能にするであろう。さらに、第３への着目は，初任時の悩みを長期的な視点から検討しようとするものである。ここから得られた結果は、キャリア発達における初任時の悩み体験の有する意味をより明確に描き出し、長期的視野からの教師支援策の構築に貢献可能な知見となるであろうことが予測される。

最後に、本研究全体を通してキャリア発達の中でも特に初任教員に焦点を当てることの意義は、次の２点にある。

第１に、大学での養成段階の教育と入職してからの現職教育の移行の在り方について問い直す際に、有効な知見を提示できる点である。

第２に、実効性のある初任者研修プログラムや初任者から熟達教師への教師キャリア発達を具体的に描くための基礎デザインの構築に貢献できる点である。これら２つは本研究の最終的な目的であり、今後の我が国の教師教育を総合的に捉える一つの枠組みとなるものと考える。

（都丸けい子）

３　教師キャリアに関するアンケート調査の分析

１）はじめに

現職教員等を対象に行った教師キャリアに関する質問紙調査の結果を概観するとともに、調査結果に対する若干の考察を行う。

調査は「教師キャリアに関するアンケート調査」（大野精一作成）というタイトルで 2007 年 11 月 10 日に東北圏で開催されたカウンセリング関連の学会に出席した現職教員等を対象に行われた。回収されたデータ件数は全 26 件であった。質問項目は回答者の属性に関する質問（選択枝式）全 5 項目と教師キャリアの形成過程に関する質問全 8 項目からなる。

２）調査結果の概観

ここでは回答の記述内容からの、新規採用教員の初期におけるキャリア形成上の問題点となりうる事柄の探索的な抽出に主眼を置く。調査対象者の属性に関する客観的な質問については、回答内容の件数を整理しおおまかな傾向の把握に努めた。自由記述の質問に対する回答に関しては、筆者らの解釈に従って記述内容の分類を施した。

①調査対象者の属性

調査対象者の属性は以下の通りである。

1. 性別　男:7 名　女:18 名　無記入:1 名
2. 所属　幼稚園:0 名　小学校:3 名　中学校:7 名　高等学校:12 名　大学:0 名　高等専門学校:0 名　特別支援学校:3 名　その他:1 名
3. 職名　校長：0 名　教頭（副校長）:0 名　教諭:11 名　養護教諭:9 名　その他:6 名
4. 勤務形態　常勤:17 名　期限付き採用:3 名　非常勤:3 名　その他:0 名　無記入・不明:3 名
5. 勤務年数　5 年未満:4 名　5 年以上 15 年未満 5 名　15 年以上 17 名　平均年数：20 年 3 ヶ月

調査対象者の属性に関する傾向としては、(1)女性の割合が高い（全 18 名、全体の 7 割弱）、(2)中等教育課程の割合が高い（全 19 名、全体の 7 割強）、(3)養護教諭ならびに適応施設相談員・スクールカウンセラーの割合が高い（全 12 名、全体の 5 割弱）、といった点があげられる。また、平均勤務年数を見る限りではベテラン教員の割合が高いといえよう。

②教職を志望した理由

質問５「教職を志した理由をお聞かせ下さい」に対する回答を概観する。この質問に対して、調査対象者たちが「教職を志した理由」としてあげた事柄は以下のように大別できる。

a）恩師からの影響　b）教育実習での体験　c）生徒との関わりへの希求

d）授業・教えることへの興味

a)は学生時代に出会った恩師に対するあこがれ等をあげるものである。b)は教育実習における何らかのポジティブな体験による影響を指摘するものである。c)は「子どもと関わる仕事がしたい」

といった生徒との関係構築やコミュニケーションへの希求を述べている。d)は自分が専門とする事柄を教えることへの興味をあげるものである。

③就職前の心配・課題・問題

質問 6-1「教職にはじめて就かれた日以前にはどのようなことがご心配・課題・問題等（ご自身のことや学校のこと等）になると予想されましたか」に対する回答を概観する。この質問に対して、調査対象者たちが教職に就く以前に予想した「心配・課題・問題等」としてあげた事柄は以下のように大別できる。

a）生徒との関係　b）同僚・先輩教師との関係　c）授業　d）職務の継続に関する事柄　e）具体的な内容を伴わない漠然とした不安

a)については生徒とのコミュニケーションや信頼関係構築に関する内容が主であった。b)は職場の同僚や先輩教師とのコミュニケーションや信頼関係構築を不安視する内容である。c)は授業を行う上での知識や技量に対する不安を主に訴えるものである。d)は職務内容を問わず社会人として勤務が継続できるかといった点に関する不安を述べるものである。e)は文字通り「漠然とした不安」に類する内容の回答である。

④就職から１ヶ月までの心配・課題・問題とその対処

質問 6-2「教職にはじめて就かれてから１ヶ月（あるいはその初期）に実際にどのようなご心配・課題・問題等がありましたか」および質問 6-3「教職にはじめて就かれてから１ヶ月間（あるいはその初期）の実際のご心配・課題・問題等にどのように対処されましたか」に対する回答を概観する。

質問 6-2 に対する回答から、調査対象者たちが就職後１ヶ月の間に感じた「心配・課題・問題等」は以下のように大別できる。

a）生徒との関係　b）同僚・先輩教師との関係　c）授業　d）授業・生徒指導以外の職務遂行

e）保護者との関係　f）地域社会との関係　g）その他

a)に関しては、生徒が反抗する、言うことを聞かないといった回答があった。また重度心身障害児とのコミュニケーションがうまく取れなかったことをあげる回答もあった。b)は学校内での人間関係に関する内容である。ここには具体的な人間関係だけでなく、「学校内の職務体制に占める自分のポジションへの不安」といった内容も含まれる。c)は授業準備・教材研究の不足と生徒を授業に集中させる技量の不足に大別される。d)は職務の全体的なワークフローが把握できないこと（把握しようとしてもよく見えてこない、というニュアンスを含む）、個々の具体的な職務遂行に不安があったことなどをあげる回答があった。e)は保護者との接し方に不安があったというものである。f)は勤務する学校周辺のいわゆる“土地柄”の理解・把握に関するものである。これに類する回答の前提には生徒の気質を“土地柄”との関連で捉える見方がある。g)は「特に問題はなかった」「無我夢中だったためにその頃のことを思い出せない」「何をやっても手応えがなく不安」とった回答があった。「特に問題はなかった」という回答に関しては、先輩教員や同僚による協力があったことが

書かれていた。

一方で質問 6-3、すなわちこれらの心配に対する対処については以下のように分類される。

a）先輩あるいは同期の教師からの助言　b）自助努力　c）学校外の友人等からの助言

d）その他

a)については自分から先輩教師に対して質問や相談を持ちかけたという回答が目立った。調査対象者の過半数以上が a)に類する回答をした。b)については他人に対する相談や質問以外の、自分自身で行う対処を意味する。具体的には書籍から学ぶ、ノートを取る、自己の観察（振り返り）や分析をする、といったものがあげられる。c)は相談相手として「学校以外の人」と明記した回答が含まれる。a)と比べれば少数ではあるが、複数件の回答があった。d)については「気分転換をする」といった内容の回答や、そもそも対処ができず「落込んでいた」という内容の回答があった。

⑤就職１ヶ月後から１年目までの心配・課題・問題とその対処

質問 6-4「教職にはじめて就かれてから１ヶ月（あるいはその初期）後から１年間に実際にどのようなご心配・課題・問題等がありましたか」および質問 6-5「教職にはじめて就かれてから１ヶ月（あるいはその初期）後から１年間の実際のご心配・課題・問題等にどのように対処されましたか」に対する回答を概観する。

質問 6-4 に対する回答から、調査対象者たちが就職後１ヶ月の間に感じた「心配・課題・問題等」は以下のように大別できる。

a）理想と現実のギャップ　b）職務の役割分担と連携　c）生徒との関係　d）授業　e）その他

a)に関しては、「自分のやりたいこと/すべきだと思うこと」と「実際にしなければならないこと」のギャップに対するフラストレーションに言及する回答があった。具体的な内容としては、たとえば教科指導より生徒指導を優先しなければならない状況や、養護教諭としての活動よりも雑務が大半を占める状況などがあった。b)に関しては、保健室とクラス（クラス担任）との連携等、養護教諭としての活動に特有の問題に関する回答があった。c)に関しては前出の質問 6-2 に対する回答とほぼ同内容であった。特に学級運営や部活指導の場面の信頼関係構築や、問題行動のあった生徒への対処に不安があるといった内容の回答があった。d)については養護教諭と教科担当を兼任することによる授業準備の難しさを指摘する回答があった。e)については職場環境の変化に対するストレス、自己の将来のキャリア像が明確でないことへの不安、自分に自信が持てないこと等があげられた。

一方で質問 6-5、すなわちこれらの心配に対する対処については以下のように分類される。

a）先輩あるいは同期の教師からの助言　b）同僚への働きかけ　c）研修会への参加

d）自助努力　e）学校外の友人等からの助言

対処の仕方については多くの回答の中で a)が指摘された。また a)、d)、e)に関しての回答は質問 6-3 で見られたものとほぼ同内容であった。

一方、質問 6-5 において特徴的だった回答は b)および c)である。b)は相談や助言を仰ぐのでは

なく、自分から同僚（先輩、同期を含む）に積極的に働き掛けて問題解決への参加を促す形での対処である。c)は学校外の研修会への参加による情報収集や自己研鑽をあげるものである。これらは「就職から１ヶ月以内」の期間には見られなかった内容である。

⑥現在の心配・課題・問題とその対処

質問 6-6「今現在はどのようなご心配・課題・問題等がありますか。またこれらにどのような方向から対処されていますか」に対する回答を概観する。

まず質問前半部の「心配・課題・問題等」に関しては以下のようなことが指摘された。

a）職務における余裕の無さ　b）多様化する生徒の実態への対処　c）保護者との関係

d）同僚との関係　e）自己のキャリアに関する事柄

a)に関しては近年の傾向として職務の幅の広がりや仕事量の増加が述べられており、それに呼応して「生徒と話す時間がない」「職務について考える余裕がない」といった問題が生じているという。b)に関しては変化する社会や生徒の価値観への対応の難しさ、特に不登校生徒への対応の難しさがあげられている。また不登校生徒に関しては教師側の理解不足の問題も指摘されている。c)に関しては保護者の目が厳しくなったことや、いわゆる「モンスターペアレント」と呼ばれる保護者への対応の難しさが述べられている。d)に関しては同僚との意見相違の調整が難しいことや指示伝達事項の徹底の不足などがあげられている。e)についてはキャリアアップと家庭生活の両立の問題や自己の職務（養護教諭）の専門性に対する疑問と葛藤があることなどが述べられている。

一方質問後半部の「対処」については以下のようなことが述べられている。

a）自己研鑽の継続　b）同僚との連携強化　c）その他

a)は自己の資質向上をあげるものであり、回答の具体的内容は様々であった。たとえば「自問自答」「研鑽する気持ちの持続」「目標を持つ」「柔軟な思考を忘れぬように心がける」「多角的に学習する」「研修会への参加」といったものがあった。一方 b)は問題提起や情報共有を通した同僚との連携強化をあげるものである。c)はこれら以外のものであり、具体的には「日々の学校生活を楽しむ工夫をする」「家族に理解してもらえるように努力する（家事をする）」「生徒から離れないこと」などがあった。

⑦新規採用教員への助言

質問 7「ご自身のキャリアをふまえ、新規採用教員へのご助言をお願いいたします」に対する回答を概観する。

回答された「助言」の内容は以下のように分類される。

a）一人で悩まず同僚に相談する　b）多様な人たちと交流を持つ　c）自己の目標を明確化する

d）実体験から学ぶ　e）ともかく職務を継続する　f）自己研鑽を継続する　g）授業を重視する

a)に関しては「一人で悩まないこと」を強調する回答が目立った。また相談相手としての同僚、特に先輩教員との重要性が述べられていた。b)は同業者である同僚以外との交流の重要性を指摘する意見である。特に異業種の人や生徒、保護者からも学ぶことのできる柔軟性の大切さが指摘され

た。c)は自己のテーマや目標を持ち、常に「自分に出来ること」を模索しかつ実践することや、自己を客観視することの重要性があげられていた。d)は特に失敗や問題から学ぶことの重要性が指摘された。また疑問は常に意識化することや、体験と考察を意識的に習慣化することなども述べられていた。e)に関しては困難にあってもとにかく職務を継続すること（期間については「1 年間」ないしは「3 年間」という言及があった）の重要性があげられている。f)については「専門書を読むこと」や「研修会へ参加すること」などがあげられた。g)については生徒に関する様々な問題は結局のところ教員が「分かる授業」をしているかどうかに集約されるという意見があった。

３）調査結果に対する考察

今回の調査結果から、教職において直面する心配・課題・問題とその対処の仕方は、教職経験を積むごとに一定の傾向を持って変化することが分かった。ここでは調査結果から見えてきた「心配・課題・問題」と「対処」の変化の典型をそれぞれ図式化するとともに、各図式の背景にある、図式の変化をもたらす要因に対する探索的な考察を行った。

①心配・課題・問題の変化

心配・課題・問題の変化は以下のように図式化される。

(1)漠然とした不安→(2)周囲との信頼関係構築・授業への対応→(3)学校全体の中での自己の役割の確立・職務職責の捉え直し→(4)変化する状況への対応

この図式についての考察は次の通りである。就職前の段階における心配・課題・問題は具体性を欠くものが多くを占めた。ここから、この時期はまだ教職に関する具体的なイメージが描けず、心配・課題・問題よりも「漠然とした不安」というべきものが意識の中心を占めることが窺える(1)。就職直後の 1 ヶ月間は生徒、同僚、保護者等との関係に関する心配・課題・問題が多くを占めた。ここから、この時期では周囲との信頼関係構築が最大の課題となることが窺える(2)。教職経験を 1 ヶ月積むことによって、職務・職責の分担に関することや、職務に関する自己のイメージと現実とのギャップに関することなどが心配・課題・問題として新たに加わるようになる(3)。これはある程度職務に慣れたことで、学校全体での自己の位置が見え始めたことと関係があるように思われる（ただしこの時期には 2 の課題も引き継がれている)。他方、キャリアを積んでベテラン教員になると 1 年目までに意識された問題等は解決の術を身に付ける一方で、変化する状況（たとえば時代的状況など）への対応の難しさが新たな問題として意識されるようになる(4)。この背景には学内での立場がもたらす現実的な多忙感のほかに、年齢的な要因や、閉域としての学校の中で長く過ごしたことによる外部社会との関わりの少なさの自覚がもたらす自信の無さなどがあるものと思われる。

②対処の変化

対処の変化は以下のように図式化される。

I. (1)先輩・同僚への漠然とした相談→(2)先輩・同僚を巻き込んだ問題解決

II. (1)自助努力→(2)研修会等への参加・学校外の人との交流

対処の変化に関しては、対処の仕方に応じて２系統に分けられる。I は広い意味で他者との協同による対処を目指すもの、II は自己の力による対処を目指すものである。これらはキャリアの初期から後期に至るまで共通して並列的に現れたため、あえて別の系統として図式化した。

I の図式に関する考察は次の通りである。キャリア初期（就職後１ヶ月以内）においては、いわゆる「相談」が主流を占める(1)。ここで相談とは何らかの問題解決（およびそれに向けられた結論や行動）に向かった議論ではなく、「話を聞いてもらうこと」自体に重点が置かれるものを指す。したがって、「愚痴を聞いてもらう」といった類いもここに含まれる。他方、教職経験を積むことによって、他者を求める対処の仕方には具体的な問題解決に向けられた議論や説得が加わるようになる(2)。この段階で一般的な相談の必要性が減じるとは必ずしも言えないが、教職経験を積むことがより明確な理由に基づく行動を促す面があると推測される。

II の図式に関する考察は次の通りである。キャリア初期においては、書物等を用いて自分一人で勉強をするというのが主となる(1)。おそらく、この段階ではまだ自己研鑽のために活用可能なリソースに対する知識が浅いため、学生時代からの習慣に頼って解決を試みることになるものと推測される。他方、教職経験を積むことによって、そこに研修会等への参加や学校外の人（たとえば異業種の職業人など）との連携などが加わってくる(2)。これは一義的には自己研鑽のためのリソースへの知識の増加や人脈の拡大と期を一にする現象である。しかしその背景には、教職経験を積む中で形成された、自己の視野を広げることの重要性にたいする理解や、自己の視野を広げるための手段としての独学の限界に対する認識があるものと推測される。

４）まとめ

ここでは現役教員を対象に行った教師キャリアに関する質問紙調査の結果を概観するとともに、調査結果に対する若干の考察を行った。前半では教職経験の過程で直面する心配・課題・問題には、それぞれの経験の段階に応じて一定の傾向があるとともに、その対処の仕方についても同様の傾向があることが分かった。さらに後半においてそれぞれの傾向の図式化を試みた。その結果として心配・課題・問題に関する４段階の図式と対処に関する２系統２段階の図式を得るに至った。

（斎藤俊則）

引用文献

新井肇（1999）「教師」崩壊　バーンアウト症候群克服のために　すずさわ書店

Burke, R. J., & Greenglass, E. 1995 A longitudinal study of psychological burnout in teachers, *Human Relations,* 48, 187-202.

原岡一馬(1990)教師の成長と役割意識に関する研究　名古屋大学教育学部紀要教育心理学科、37、1-22

稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久（1988）教師のライフコース：昭和史を教師として生きて　東京大学出版会
宗像恒次・椎名淳二（1988）中学校教師の燃え尽き状態の心理社会風景　土井健郎（監修）燃え尽き症候群－医師・看護婦・教師のメンタルヘルス－　金剛出版　pp.96-131
小田友子（2000）青年期における悩みの主観的体験化に関する研究－　「悩み体験スケール」の作成を通じて　人間性心理学研究、18(2)、117-127
齋藤浩一（1999）中学校教師の心理社会的ストレッサー尺度の開発　カウンセリング研究、32、254-263
都丸けい子（2007）中学校教師の生徒との関係における悩みと成長・発達に関する研究　博士論文（筑波大学）　未刊行

Research Note

Heuristic Research on Career Development of Newly-Appointed Teachers (No.1)

Saito, Toshinori; Tomaru, Keiko; and Ono, Seiichi

This research note is concerned with factors and characteristics of career development of newly-appointed teachers based on a collaborative research study, which uses exploratory, heuristic methods. It presents the status of this ongoing research and accomplishments from the first half of the study. The research questions are: What kind of “worries and concerns, as well as problems and challenges” do newly-appointed teachers have at the beginning of their career as teachers, and how do they cope with them? This first report reflects on the relationships between the importance of these concerns and challenges, and training programs for beginning teachers through a literature review, followed by a classification of how the contents of “worries and concerns, as well as problems and challenges” and various coping strategies change along teachers’ career paths through a retrospective analysis.

Key words: newly-appointed teachers, teachers′ careers, teachers′ concerns, skilled teachers